レプリカ
♂♀

ミス・キャット誕生
前編

K・ボーイ

プロローグ

人は、人生を自分自身で決めて生きることが、望ましい。だが時として、人の思惑で生き方、人生そのものが変ってゆくことがある。彼女は、そんな一人なのかもしれない。

２００３年　春　イギリス国内。
枯れた牧草地の一本道を、黒のロールスロイスが走ってゆく。
サングラスをかけたスーツ姿の運転手と、後部座席には、黒のコートに身を包んだ白髪の男が,どっしりと座っている。

『目的地に到着しました』
カーナビが言った。
車は、ぽつり、ぽつりと家が建ち並ぶ集落の中を、ゆっくりと走っていた。
集落の中心にレンガ造りの教会が見えた。車は、そこで停まった。

運転手が降りて、後部座席のドアを開ける。
白髪の男が車から降りると、教会の扉が開いた。日曜日のミサに参列した町人が出てくる。
その中に子供達と神父が出てきた。
神父は笑顔で、子供達を見送り終わると、白髪の男と目があった。

「久しぶりだな。すっかり神父が板についているようだな」
白髪の男が懐かしい表情をして言った。

「ミサだったら、終わったぞ　」
神父は、男のことを歓迎しない様子で中に入る。その後に続くように、白髪の男も入ってゆく。

「もう１２年も過ぎたんだな。君が、国の情報機関を辞めてから」
白髪の男は、祭壇に向かう神父に言う。

「君とは何も話すことはない」
神父は、背中を向けたまま、そっけなく言って歩き出す。
「ジェニーは元気にしているのか？」
白髪の男の言葉に、ピタリと神父は足を止めて、「ジェニーは、成人するまで、私が面倒を見ることになっているはずだ」
「彼女の協力が必要なんだ」
白髪の男は、神父を引き止めるように言う。
「ジェニーのことは、そっとしておいて欲しい」
神父は、再び足を止めて振り返らずに言う。

「今、再びレプリカ計画の必要性がある」
白髪の男が、神父に近寄り背中に向かって言う。

神父は振り返り、「また、女王陛下の指令でも受けたのか？　」

「女王陛下ではない。今度は、イギリス国家の重大な事業だ。君も、政府の情報機関で働いていたから、今後のわが国の情勢もわかるだろう」

「レプリカ計画は、愚かな人間のエゴで悲劇を生みだす研究だと、ミスター・フクオカは言っていた。私も同感だ。だから、政府の仕事も辞めた」
神父は、哀れむような言い方をする。

「もう昔のことだよ。それより、ジェニーに会わせて、話をさせてくれないか？」
白髪の男は、願うように頼んだ。
「彼女を利用するのは、やめてほしい」
神父は拒むような言い方をする。
「彼女を悪いようにはしない」
「悪いようにはしない・・・・・・政府は、今まで、彼女の存在を隠してきたじゃないか！　それで、今さらになって協力しろと！！　」
神父は、怒りを全面に出して言った。

「彼女の将来を考えたことがあるのか？　このまま身を隠すような生活を続けさせることが、本当にいいことだと、君も思っているわけじゃないだろう」
白髪の男が真顔で反論する。

「何を言っている。そうさせたのは、君達、政府の人間じゃないのか？」

「確かに、彼女が誕生した時は、世論が許さなかった。だが、今は違う」
「違うって・・・・・・彼女を政府のために利用するのは、やめてくれ！　」

「やがて、彼女も大人になる。自分の出生のことや、両親のことを知りたいと思うことがあるだろう。その時は、どうする。真実を知らさずに、ここで、彼女を縛り付けるような生活をさせてゆくなら、そのほうが酷だ」
白髪の男は、きっぱりと言った。

「それに君の体の状態は、あまり良くないようだな」
その言葉に、神父は蒼ざめた表情をする。

「すまん。つい、プライベートなことを知ってしまった。だが、考えてみてくれ？」
白髪の男は、優しい口調で頼んだ。

「帰ってくれないか」
「わかった。また来るよ」
と、白髪の男が去ろうとした時、扉が開いて、ヒョイと少女が顔を出した。

「神父様、お邪魔でしたか？　」
ひとりの少女が中に入って来た。
彼女がニット帽を取ると、黒い長い髪と丸い黒い目が印象的だった。
「今、帰るところだよ。邪魔したね」
白髪の男は、少女に笑みを見せて外に出た。

「どうでしたか？　」
白髪の男が、車に乗り込むと運転手が尋ねた。
「今日のところは、いい返事をもらえなかった。だが、彼女には会えた」
白髪の男は、先ほどの少女が、ジェニーだと確信できて満足そうだった。
「いいか。指示したとおりのものを設置しておいてくれ」
「はい、わかりました」
運転手が答えると、車が動き出した。

数ヶ月後。

体育館の中で、男子生徒に交じって、女子生徒のジェニーが、バスケットボールに参加していた。ジェニーがボールを受け取ると、ドリブルで素早くリングへシュートする。

「ジェニー！　」
コートの端で、クラス担任のディックが声をかけた。

ジェニーは、ディックの呼びかけに反応するように、メンバーチェンジをしてコートを出る。
ジェニーは、タオルで額の汗を拭きとりながら、ディックに近寄った。

「そろそろ返事を聞かせてもらいたいと思ってね？　」
ジェニーは、セカンダリースクールの生徒だった。卒業後の進路がまだ決まっていない。そのため、ディックが気にかけるようして訪ねて来た。

「君なら、学力も優秀でスポーツも万能だから、推薦する学校も十分やっていけると思う」
ディックは、自信たっぷりに言う。

「そのことなら・・・・・・もう少し待ってもらえませんか？　」
ジェニーは、浮かない表情をする。

「神父は、君がロンドンの学校へ行くことを、許してくれないのか？　」
ディックは、ジェニーの気持ちを察するように尋ねた。

「ええ、どうしてかわからないんですが、この町から出てゆくことを許してくれないんです」

「君が弁護士になりたいという夢は、素晴らしいことだと思う。人のために、役に立つ人間になりたいという、君の気持ち、神父もわかってくれると思うんだが」
ディックは首を傾げた。

「ジェニー！　」
コーチが、コートに戻るように指示が出す。

「今度、君の進路について、神父に会って相談してみようか？　」
「ええ、お願いします。じゃ、戻ります」
「これを渡しておこう」

ディックは、ジェニーの推薦する学校のパンフレットを渡す。

ジェニーは、ディックに軽く頭を下げてコートに戻った。

神父は、診療所にいた。
午前中の診察時間を終えた後、診察室でドクターと神父の二人だった。

「あまり、よくないようだ」
ドクターは、レントゲン写真を覗きこみながら、顔をしかめた。
「そうか・・・・・・」
神父は、わかりきった様子で言う。

「ジェニーには、病気のことは話したのか？　」
「・・・・・・」
ドクターの尋ねたことに、神父は複雑な表情をする。

「どうするつもりだ？」
「そのことだが、私が亡くなったら、ジェニーが成人するまで、君に頼みたいんだ」

「・・・・・・」
急なことで、ドクターは少し考えて話出す。
「ジェニーは、ロンドンの学校へ進学したいと希望している。学校は名門校だ。そこで、優秀な成績で卒業すれば、ジェニーにとってはいいことだと思う。だが、君は許していないようだが、どうして何だ？　」

「何も、遠くに行かなくとも、地元の学校に行っても、弁護士になる勉強は出来るはずだ」

「ジェニーが君の目から離れて、ひとりで生活させるのが心配なのか？　それなら、ロンドンに知り合いがいる。彼女に、ジェニーの面倒を見てもらおうと頼んでみようか？　」
ドクターが、神父の気持ちを察するように言う。

「ドクター、君の気持ちは嬉しいが、ジェニーは、この町で生活させてほしい。それで、君が目を光らせて見ていてほしいだ」
ドクターは、神父の言い方が、ジェニーを監視して欲しいと言っているようにも思えた。

「なあ、神父。医者として聞くじゃない。昔ながらの友人として知りたい。君は、ロンドンで何か特別な仕事をしていて、そのことが、ジェニーと関係しているんじゃないのか？　」
ドクターは、思ったままを聞いた。

「私は、ロンドンの商社で働いていた。何も特別なことはしていない」
神父は、否定するような言い方をした。

「まあ、仕事には守秘義務があるから、別に言わなくてもいいが。私が、不思議に思ったのは、君が五十を前にして、こんな小さな町に帰ってきて、神父になったことだ。しかも、自分の子供じゃない、ジェニーを連れて」
「この町は、私の故郷だ。帰ってきて何が悪いんだ」

「君は、昔から野心家だった。都会に出て、成り上がってゆくタイプだと思ったが」
「君とは、同じクラスメイトだったが、ずいぶん昔のことだ。年老いた分、欲もなくなった」
神父は言い訳ぽく言った。

「ジェニーのことを、私に預けたいなら教えてくれないか？　彼女の両親は誰で、今はどこにいるんだ？　」

「・・・・・・正直、ジェニーの両親のことは、自分もよく知らない。ある人物から、頼まれて預かった」
「その人物は誰なんだ？　」
ドクターが興味深く尋ねた。
「それは・・・・・・いや、すまん。今の話は忘れてくれ」
神父は、頑に秘密を守っている様子だった。

「ドクター、そろそろ失礼する」
神父が、診察室の椅子を立ち上がる。

「ハリス、そんなに時間はないぞ。いい結論を見つけろ。それから、あまり自分を刺激するようなことはするなよ」
ドクターは、神父のことを名前で呼んで、忠告するように言う。
「カール、時間を取らせてすまなかった」
神父もドクターの名前で呼んで、診察室を出てゆく。

ジェニーは、友人のアンジェラと一緒に校門を出た。
アンジェラは、ジェニーの家の向かいに住む少女で、学年も一緒だった。

「ねえ、アンジェラは進学する学校は決めたの？　」
「ええ、隣町の学校にしたわ」
将来、アンジェラは学校の教員になりたいと思っていた。
「ジェニーは、どうなの？　」
「うん・・・・・希望する学校は決めたんだけど」
ジェニーが浮かない表情になる。

「まだ、神父様が許してくれないの？　」
アンジェラは、察するように尋ねた。
「ええ・・・・・・最近は、神父様の体調も悪くて、言い出すタイミングがなくてね」
「そう。でも早く決めないと」
希望校の願書提出の日が近づいていた。

「ディック先生が、神父様を説得してくれることを約束してくれたの」
「そう、良かったわね」
「私の方からも機会があったら、説得してみようと思うわ」
「ジェニーだったら、ロンドンの学校も合格できると思うわ。絶対、説得しなきゃ」
アンジェラが、ジェニーを励ますように言う。
「ありがとう」
アンジェラの言葉は、ジェニーを笑顔にさせた。

ジェニーが自宅に帰ってきた。
ジェニーは、教会横の建物で、神父と一緒に暮らしていた。

ジェニーは、木製扉のドアノブに手をつけた時、ニャーと声がした。ジェニーが振り返ると黒い子猫がいた。生まれて間もなく、手のひらに入るぐらいの大きさだった。再び、ニヤーと泣くと親猫が近寄ってきて、そのまま子猫の体を口にくわえて、どこかに行ってしまった。

「ただいま」
ジェニーがリビングに入って来た。
「おかえり」
神父は、キッチンで夕食の準備を始めていた。

「神父様、体調のほうはいいんですか？」
ここ数日、神父は寝込んでいたが、今日は体調がよく起きていた。

ジェニーは、今一度、進学のことを相談してみようと思った。体調が悪い時は、話を聞き入るほど余裕もないと思い遠慮していた。だが、今日は顔色もいい様子だった。
情熱を持って話してみたら、ロンドンの学校への進学も許してもらえるかもしれない。

「神父様、お話しがあります」と、ジェニーは、希望を持って声をかけた。
「何だい？　」
神父が包丁で人参を刻む手が止まった。
ジェニーは、食卓の上にパンフレントを置いた。
それを見るなり、神父は渋い表情で椅子に腰かけた。

「来年は、ロンドンの学校に行きたいです」
ジェニーは願うように言った。

「なあ、ジェニー。弁護士になりたいというのは、いいことだと思う。だが、地元の学校に行っても、弁護士になれるはずだ」
「私、どうしても、この学校で勉強したいんです」
希望する学校は、イギリスでも有名校で、卒業生には、司法関係で働いている人間を多く出している。ジェニーは、その学校に通いたかった。

「地元の学校ならいいが、ロンドンは許さんよ」
神父は、聞き入れることもなく言う。
「どうして・・・・・・ロンドンの学校に行ってはいけないんですか？」
ジェニーが感情的に尋ねた。

「・・・・・・」
神父は答えなかった。その態度を見て、ジェニーは、
「ちゃんと理由を言って下さい。神父様はズルい！　私、神父様なんかに育てられるんじゃなかった！！」

ジェニーは、怒りでつい言葉が出た。その態度を見て、
「ジェニー！！」
神父が声を荒げて、椅子から立ち上がった瞬間、急に胸を押さえて苦しそうに床に倒れ込んだ。

「神父様！　」
ジェニーは、驚いた様子で神父に近寄る。
「・・・・・・」
神父の息が荒くなった。

ジェニーは、慌てるようにして固定電話の受話器を手にして、どこかに電話をする。

次の日の朝。
神父は、病室のベッドで意識を失ったまま寝ている。ベッドの横で、ジェニーは椅子に座ったまま見守っていた。

ドアが開いて、ディックが顔を出した。
ディックが中に入ってきて、「ずっと、起きていたのか？　」
「先生、ありがとうございました」
ジェニーは、思いつめた表情で頭を下げた。

神父の容体が悪くなった時、ジェニーは真っ先にディックに電話をした。すぐにディックは、ジェニーの元へ来て、診療所へと神父を連れて行った。ジェニーは、病室で神父に付き添い一夜を過ごした。

ドクターが入って来た。ジェニーは下を向いたままだった。
ドクターは無表情だった。そうすることで、ジェニーに動揺させないようにしているようにも見えた。

「神父の容体は、どうですか？　」
ディックが、ドクターに心配そうに尋ねた。
ドクターは一瞬考えて、「なぁ、ジェニー」
ドクターの呼びかけに、ジェニーが顔を上げる。
「なるべく、神父のそばにいてあげて欲しい」

「はい・・・・・・」
ジェニーは静かに頷いた。
ドクターは頼むような言い方をした。それは、神父の命が長くはないと言っているのだと、二人とも思った。
ドクターが出て行く。

「昨日から、何も食べていないだろう」
ディックは、思い出したように鞄の中から紙袋取り出した。袋の中はサンドイッチと、パック入りのオレンジジュース入っていて、それをジェニーに渡した。

「・・・・・・」
ジェニーは、じっと神父の寝顔を見つめていた。そして、
「私・・・・・・神父様にひどいこと言っちゃった・・・・・・だから」
ジェニーは、ディックの顔を見て、ピンと張り詰めたものが切れた感じになった。

「ジェニーのせいじゃない。元々、神父には心臓に持病があったんだ」
ディックがしゃがみ込んで、顔を下に向けたジェニーに言う。
「私が・・・・・・」
ジェニーは半泣き状態だった。
「神父様、ごめんなさい！」
ジェニーは大粒の涙が出して、ディックの胸の中に寄りかかり泣き崩れた。

「ジェニー、君は悪くないよ」
ディックは、優しく言ってなだめた。

「先生」
帰りのホームルームを終えた後、アンジェラが職員室に来た。

「ジェニーのことかい？　」
ディックは、アンジェラが近づくなり、聞きたいことがわかっているようだった。
「神父様の容体は？　」
ジェニーは、三日間学校を休んでいる。診療所の病室で、神父のそばに付き添っていることは、アンジェラも知っていた。
「正直なところ・・・・・・あまり良くはない」
ディックは硬い表情をする。

「そう・・・・・・私に何か出来ることはありませんか？　」
アンジェラは、何かジェニーに手助けしてあげたい気持ちがあった。
ディックは、しばらく考えて、「授業内容をノートに書いて、それをジェニーに渡してあげたらどうだい？　」
「それはいい考えだわ。試験も近いことだし」
アンジェラも賛同する。
「それじゃ、明日ノートを持ってきます」
「頼むよ」
アンジェラが職員室を出ようとすると、携帯電話が鳴った。

「はい・・・・・・」
ディックが、電話に出るなり青ざめた表情に変わった。
「すぐに行きます」
「先生、何かあったんですか？　」
アンジェラも電話の内容が気になった。
「神父の容体が悪いようだ。今から診療所に行ってくる」
「私も行っていいですか？　」
「わかった。一緒に行こう」
二人は、慌ただしく職員室を出た。

ディックとアンジェラが病室に来ると、ジェニーが座って、ベッドに寝ている神父の体を両手でさすっていた。その横でドクターが立っている。

急に神父が目を開けた。
「ジェニー、神父が何かを言っているようだ」
ドクターが気付いた。

ジェニーは右耳を、神父の口元に近づけた。
神父の口元が動いて、小さくつぶやくように言った。
「レプリカ・・・・・・！？　」
ジェニーが、神父の言ったことを口にした。
再び、神父の口元が動く。ジェニーが神父の口元に近づける。

「十字架・・・・・・十字架が欲しいの？　」
ジェニーは、神父の首元にかけてある十字架を外して、「十字架よ」
ジェニーが、神父の右手に十字架を握りらせる。
神父の口元が動く、ジェニー右耳を近づけた。
「えっ！」
ジェニーが目を丸くして驚いた表情をした。

神父は目を閉じた。
ドクターが、意識の確認をして、「午後５時２２分。ご臨終です」
ドクターが静かに言った。
その瞬間、ジェニーは、神父の寝ているベッドに顔を埋めて泣き崩れた。

次の日。
神父の葬儀が行われた。

ドクターの付き添いで、ジェニーが喪主を務めた。葬儀は町の人々が参列して、神父の死を悼んだ。

夜。ジェニーは、ひとり家のリビングにいた。ここ数日間、慌ただしかった。すべてを終えて、ひとりになると、自分はひとりぼっちになったことを感じた。途方に暮れて、自然に涙がこぼれてきた。すると、窓の方から鳴き声が聞こえてきた。

ジェニーが、窓を開けて下を見渡すと、以前に見た黒い子猫がいた。ジェニーは、外に出て子猫に近づく。
「どうしたの？　」
ジェニーは子猫を抱きかかる。
「お母さんはいないの？　」
ジェニーは周りを見渡す。
「ニャー」
いないことを答えているように、子猫は鳴いた。

ジェニーは、子猫を抱きかかえ家に入って、ミルクを与えた。子猫は、お腹を空かしていたのか、勢いよく皿に入ったミルクを飲み始めた。

「ひょっとして、あなたも、ひとりぼっちになったの？　」
「ニヤー」
子猫はひと言鳴いて、皿の中のミルクを飲みほした。

次の日。
ジェニーは、神父の墓へとやって来た。
墓地は丘の上にあって、そこから町全体が見下ろせた。まだ、春先だが肌寒い冷たい風が吹いている。

ジェニーは、神父の墓石の前で、しゃがみこんで花を供えて祈った。そばで、ドクターとディックも立ったまま祈った。その時、墓に近づいてくる男の姿が見えた。男は、ハット帽を被りコートを着ていた。

「ハリス・コークさんのお墓でしょうか？　」
男が尋ねると、ジェニーは、神父を訪ねてきた白髪の男だと気付いた。

「はい」
ジエニーが答える。
「お祈りをさせていただけませんか？　」
「どうぞ」
ジェニーの言葉で、男は、墓の前で膝間ついて花を供えて祈った後、三人に礼をした。

「以前、教会でお会いしましたね」
ジェニーが言うと、「覚えてくれていたんだね」
男は嬉しそうに言った。

「失礼なことをお聞きしますが、神父とは、どういうご関係なんでしょうか？　」
ドクターは、どう見ても町の人間でもなく、神父の知人でもなさそうな、男のことが気になって尋ねた。

「彼とは、ロンドンにいた頃の仕事仲間でした」
「ロンドン・・・・・・」
その言葉に、何故かドクターは秘密めいたものがあることを感じて、「どういったお仕事ですか？　」
「商社で働いていました。彼は実に仕事の出来た人間でした」
男は、墓石の方に目をやる。

「ここ数日、彼のことが気になっていました。亡くなったことを知って、ここに来たわけです。彼とは約束がありました」
「約束・・・・・・？」
「ジェニーを引き取りに来ました」

「・・・・・・・」
白髪の男の言葉に、ジェニーは目を丸くした。ドクターとディックは、顔を見合わせた。

「どう思う？　」
ドクターが診察室の椅子に腰かけながら、書面を机の上に置いて、ディックに尋ねる。
「ここに書いてあるサインは、神父のものと間違いないんでしょうか？」
ディックもわからない様子で尋ね返した。

白髪の男が、ジェニーを引き取ることを告げた時、一枚の書面を取り出した。それは、神父が亡くなった後、白髪の男が、ジェニーを引き取るということの約束の書面だった。

「ジェニーは、彼が引き取るということでしょうか？」
「そういうことになる。１９９１年３月１０日に神父はサインをしている。ジェニーが３歳の時のことのようだ。神父は、その後に、この町に帰ってきている。まさか、こんな約束をしているなんて・・・・・・・」

「彼は一体、どんな人物なんですか？　」
ディックが不安そうな顔をする。
「エディ・アーノルドと言っていた。彼は、ロンドンで貿易会社を営んでいる資産家のようだ。ジェニーが、そこに行けば生活面は心配することはないが・・・・・・」
ドクターは、言葉を切って考え込んだ。

「本当に信用できるんでしょうか？　」
ディックの言葉に、ドクターは黙りこんだままだった。

ドクターは、エディに対して信用できないようなところがあった。
神父から、ジェニーの面倒を見て欲しいと頼まれていた。その時、エディのことを言っていなかったことが気になった。

「もし可能であれば、ドクターがジェニーの親代わりになっていただけませんか？　」
ディックが願うような言い方をする。

「ジェニーには身内がいません。少なくとも、成人するまでは気の知れた人間が、そばにいてあげていたほうがいいと思います」
「・・・・・・そうだな。ハリスからも頼まれていた。ジェニーの親代わりになろう」
ドクターも心を決めた。

「後は、どうやって、ジェニーを引き止めるかですね」
ディックは、書面に書いてあることを気にかけた。

「心配することはない。最終的に決めるのは、ジェニー自身だ」
「そうですね。ジェニーが、エディのところに行かないと言えば、この書面の意味もないということですね」
「そういうことだ」
ドクターは、自信を持ったように笑みを見せた。

診察室の扉が開いた。
「ジェニーが来ました」
看護師が顔を出して言った。

「こっちへ来るように言ってくれないか？　」
ドクターの言葉に、ジェニーが診察室に入ってきた。
「ジェニー、話がある」
ドクターが、診察用の椅子に座るように言った。
「僕は失礼します」
ディックは、二人きりにさせるため診察室を出ようとした。
「ディック」
ドクターが引き止めた。
「君にもいて欲しい」
ドクターが頼むような言い方をする。
「わかりました」
ディックも拒む理由はないと思い、ジェニーの横に立った。

「なあ・・・・・・ジェニー。今後の君のことだが、二つの選択がある。ひとつは、昨日現れた、エディという人物の所に行くことができる。この書面に書いてあるのは、間違いなくハリスが書いたもので、法的にも認められているものだ。たぶん、ハリスが君を引き取る時に、彼と交わした約束だと思う」
ドクターが、ジェニーに書面を渡す。

「エディとは、まったく面識がないのかい？　」
「一度だけ、教会で神父様と会っていた時にお会いしただけです」
ドクターの尋ねたことに、ジェニーは書面を見ながら答えた。

「エディさんは、どんな人なんですか？　」

「彼は、ハリスがロンドンにいた頃、同じ職場の仲間らしい。なぜ彼が、君を引き取る人間なったかは、はっきりわからない。正直、エディという人物に君に預けるのは、不安があるんだ」

「ドクターも僕も、彼の所には行ってほしくないと思っている」
話の途中、ディックが本音を言った。

「良ければ、私のところに来ないか？　」
ドクターが真顔で尋ねた。

「成人するまでは、私が君の親代わりになってもいいと思っている」
ドクターの言葉に、ジェニーは黙り込んだ。
「ロンドンの学校には行けないが、僕も君が弁護士になれるように協力するよ」
ディックも真顔で言う。

ジェニーは、すぐには返事をしなかった。下を向いたまま考えているようだった。
「どうだろう？　」
ドクターが、ジェニーの気持ちを探るように尋ねた。

「私、先生の所へ行っても、本当に大丈夫なんでしょうか？　」
ジェニーが不安そうに尋ねた。

「ああ、今は子供も家を出て、妻と二人だけの生活だ。妻も昔から、ジェニーのことは知っている。家に来ることは了解してもらえると思うよ」

「わかりました。いろいろご迷惑をかけるとは思いますが、よろしくお願いします」

ジェニーは、神父亡き後、どこに行くべきなのか、自分では決められないことだと思った。だが、見知らむエディの所より、気心が知れたドクターの所で世話になるほうが、落ち着いて生活できると、ジェニーも考えていた。

「それじゃ、今日の夜からでも家に来るといい」
「いえ、明日からにさせてもらえませんか？　」
「どうしてだ？　」
ドクターが気にかけた。
「いろいろと荷造りしたいんです」
「それじゃ、明日の朝、迎いに行くからね」
ジェニーは、ドクターと約束をした。

「ありがとうございます」
ジェニーは、二人に深く礼をして、診察室を出た。

ドクターとディックは、ホッとした様子で笑みを見せた。

その頃、診療所近くで黒のロールスロイスが停まっていた。
後部座席でエディが、盗聴した診察室での会話を一部始終聞いていた。「・・・・・・」
エディは、自分の思惑とは違ったことになろうとしていることに焦りがあった。しばらく考えて、「彼女の所へ行ってくれ」
何か考えがあるように、運転手に言う。

「はい」
運転手は返事をして、車を走らせた。

ジェニーが家に帰ってくると、扉の前で子猫がいた。まるで、ジェニーの帰りを待っているようだった。
「いたのね・・・・・・」
ジェニーが子猫を抱きかかえた。
「ごめんね・・・・・・明日から私は、この家にはいないの。あなたを連れてゆくことはできないの」
ジェニーは、子猫の頭をさすりながら寂しそうに言った。

「君の友達かい？　」
声がして振り返ると、エディが立っていた。
ジェニーは、ハッとした。断る相手に会うことは、正直、バツが悪い気持ちがあった。

「まだ生まれて間もないようだね」
エディが笑みをみせて、子猫をみた。
「エディさん、私のことなんですが・・・・・・・」
「待ってくれ！　君が私の元へ来るか、来ないかの話なら、それは明日聞こう。今日は、君に頼みたいことがあるんだ」
エディは慌てるように言った。

「頼みたいこと・・・・・・！？」
ジェニーが首を傾げた。
「すまない。急なことを言って・・・・・・・写真を見せて欲しいんだ」
「写真って？　」
「ハリスがロンドンで働いていた頃の写真で、白衣姿の日本人男性が写っているものだ。それには重要なものが書き記してある」
「重要なもの？」
エディの協調するような言い方に、ジェニーが反応するように興味を持った。

「ジェニー」
会話の途中に、誰かの声がした。
二人が振り返ると、アンジェラがいた。
「どうしたの？」
ジェニーが、アンジェラに近寄る。
「これを」
アンジェラが、授業内容を書いたノートを持っていた。
「ありがとう」
ジェニーがノートを受け取る。

「ねえ、あの人、なぜここにいるの？　」
アンジェラは、エディをチラリと見た。
「ジェニー、邪魔してね。それじゃ、明日」
エディは、アンジェラから警戒されている雰囲気を感じ取って、その場を去ることにした。

「もうちょっとだったな・・・・・・」
エディが、車の後部座席に乗り込むと悔しそうに言う。
「いいんですか？　写真のことまで話して」
運転手が心配する。
「彼女を引き取るためだ。多少のルール違反はかまわんよ。出してくれ」
エディは苛立った様子だった。
車は静かに動き出した。

夜。
ジェニーは、家で荷造りをしていた。明日には、新しい神父が来ることになっていた。そうなると、家を出なければいけない。ダンボールの中には、ドクターの家に持ってゆくものを入れ込んだ。

リビングのテーブルの上に、十字架を目にした。ジェニーが十字架を左の手のひらに置いた。神父が亡くなる時に、十字架を渡されて、『すべての始まりが、ここにある』と、謎めいた言葉を残した。
神父は、何かを伝えようとしていたが、ジェニーには何のことかわからなかった。

改めて十字架を見ると、先のほうが複雑な形をしていた。よく見ると、鍵のようなものにも見えた。ジェニーは、何かがひらめいて教会へ向かった。

ジェニーが礼拝堂に入ると、正面の壁にはキリスト像の十字架がある。その下には祭壇が置かれていて、そこへゆっくり歩いて行く。葬儀の時は、花を飾り華やかに見える祭壇も、普段は何も置かれていない木で用いれたた箱のものだった。

ジェニーが、祭壇の側面に回り扉の前でしゃがみ込んだ。
以前、神父が十字架を使って、祭壇の鍵穴を開けているのを見たことがあった。この中に、神父が伝えたいものの何かがあるように思えた。ジェニーが、十字架を鍵穴へ入れて左右動かすと、ガチャンと開いたような音がした。
扉を開けると、葬儀時に使う装飾品が入っていた。その中に、持ち運び用のアルミケースがあった。

その頃、教会の横にロールスロイスが停まっている。
エディは後部座席から、車内に持ち込まれたテレビカメラを見ていた。
カメラには、ジェニーが祭壇の中を開ける姿が映し出されていた。

「カメラをズームしてくれ？」
エディが運転手に指示すると、テレビ画面にジェニーの手が大きく映された。
アルミケースを開けて、一枚の写真を取り出すのが見えると、エディは目を見開いてカメラを覗き込む。
すると、「ちょっと出てくる」
エディは、慌てて車から降りた。

ジェニーは、アルミケースを開けようとすると鍵が掛かっていた。鍵穴に十字架を入れてみるとガチャと開いた。
ゆっくりと箱を開けると、『親愛なるジェニーへ』と、書いてある封筒があった。そして１枚の写真が入っていた。
写真は、白衣を着た東洋人の男性が赤ちゃんを抱いていた。

ジェニーは、初めてみる写真で、どうして神父は、こんなものを大事にしまい込んでいるのかと不思議に思った。
ジェニーは、封筒の中を取り出して手紙を読んだ。

『ジェニー、君がこの手紙を読んでいる頃は、私が亡くなった後だろう。そして、君がまだ成人していないことが想像できるだろう。本当のことを言えば、君が大人になった時、すべてを話すべきか、今も悩んでいる反面、神に仕える人間として、真実を伝えることも必要だと感じている。だから、知っていることのすべてを話そう。

君は、ある人物の研究によって生まれてきた。だが、それは君が生まれてきたいという思いで誕生した。それは事実だ。私がいなくなった後、君を引き取りたいと人物が現れるだろう。その人物が、君にとっては、幸せをもたらすのか、不幸を作るのか。残念だが、私にもわからない。
だが、君には信念というものがある。自分で考えて行動できる、強い心を持っている。自分の人生は、自分で決めて欲しいのが、私の気持ちだ。

人の歩みは主によって確かにされる。主はその人の道を喜ばれる
ハリス・コーク』

「何を見つけたんだい？」
ジェニーが手紙を読み終えると、声がした。
振り返ると、「エディさん！　どうしてここに？　」
ジェニーは、ハッとして立ち上がった。

「驚かせて、すまない。今ちょうど、教会の前を通りかかったら、扉が開いていて光が漏れていたから、気になって覗いてみたんだよ」
エディは、ジェニーの顔色を見て、すぐに落ち着かせるように優しく言った。

「それは・・・・・・！？」
エディは、アルミケースの上に置いてある写真に目をやる。
「見せてもらってもいいかな？　」
ジェニーは、エディが探していた写真だと直感して、「どうぞ」
ジェニーが差し出すと、エディが受け取る。

「これは・・・・・・」
エディは写真を見るなり、意外そうな顔をする。そして、「セカンド・・・・・・」
写真の裏に書いてある『second』の黒文字を意味ありげに言った。
「どうしたんですか？　」
明らかに様子が変わったエディを、ジェニーは気になった。
「ちょっと座らせてもらうよ」
エディは、長椅子に腰掛けて何やら考えこんだ。

「この写真の男性は、私の父親なんですか？　」
ジェニーが、真っ先に気になったことを尋ねた。
「はっきりとは言えないが・・・・・・この写真は君の父親ではないだろう」
エディは、思い当たるような言い方をする。
「なぁ、ジェニー・・・・・・私の話を誰にも言わないと約束できるかい？　」
エディは、急に思い切った様子で真顔になった。

「えっ！？　」
ジェニーは、突然のことで当惑顔になった。だが、エディが何か重大なことを言おうとしていること感じた。
「ええ、私にとって大事なことなら聞かせて下さい」
ジェニー自身、自分の出生のことを知りたい気持ちは本心だった。

「以前、国家ぐるみのプロジェクトで、遺伝子学の研究が行われていた。今再び、そのプロジェクトが再開される。それで私は、君をプロジェクトに参加させるための説得にきたわけだ。だが、私にも知らない事実があるようだ」
エディは、何か心にひっかかったものがあるようだった。

「プロジェクトとか、遺伝子学とか、私にどういう関係があるんですか？　」

ジェニーが首を傾げた。

「今まで、ハリスが君の出生のことを言わなかったは、説明するのが複雑すぎて、君自身に理解してもらえるか迷っていたからだろう。だが、君自身が真実を知りたいなら、私が協力しょう」
エディは強い口調で言った。

「教えて下さい。一体、神父様は私に何を隠していたんですか？　」
ジェニーは、エディに近寄る。
「レプリカ計画だ」
「レプリカ・・・・・・？」
ジェニーは、神父が亡くなる前に言った言葉のことを思い出した。

「君は、国家機密のプロジェクトで生まれた」
「・・・・・・！？」
ジェニーは、一瞬言葉を失った。

二人の間に、重苦しい空気が流れて沈黙があった。それを払いのけるように、「私を信じて欲しい」
エディは、強い口調で言った。

「君は、遺伝子学の研究で生まれたことは事実だ。だが、君の両親が誰で、どういう経緯で生まれてきたのかは、私にもわからない。それに、今わかったことだが、君は二番目だということだ・・・・・・・」
エディは考え深く言った。

ジェニーは、自分の出生が想像以上の話で愕然と聞いていた。

「ジェニー・・・・・・真実を知れば、傷ついてしまうかもしれない。だが、それを知ることで、新たに始まる未来のきっかけになることもあるはずだ。約束しよう。私の所に来れば、君の両親が誰で、出生の秘密を教えることが出来るはずだ」

エディは熱い思いで言って、「君にも協力してもらいたいことがあるんだ」と、言葉を付け加えた。

「協力・・・・・・」
ジェニーは困惑顔で小さな声で尋ねた。

「それは、私の所に来てから話そう。君を悪いようにはしない」
「・・・・・・」
「明日まで考えてくれないか？　」
エディが優しく尋ねた。
ジェニーは、小さく頷いた。

エディは教会を出て、車に乗り込んだ。
ドスンと後部座席に座りこんで、ため息をついた。

「プロジェクトの話を持ち出して、大丈夫なんですか？　」
運転手が心配そうに尋ねた。
「彼女が、私の所に来るか、一か八かの賭けだ。それに、局長自身も大事なことを、私にも話していなかった。まったく・・・・・・」
エディは腹ただしく言った。
車はゆっくり動き出した。

明け方。
ベッドの中、ジェニーは寝つかれなかった。

エディの話はショッキングで、しばらく困惑していたが、時間とともに気を取り戻して冷静に考えてみた。
エディは、本当のことを言っているようにも思えた。

神父には、両親が誰で、どういう経緯で、私を引き取ったのか。正直真実を知りたい気持ちはあった。だが、育ててもらっている恩みたいなものがあって、聞き出すことに気が引けた。しかし、神父が亡くなった時、そのことを尋ねておくべきだったと、後悔したことも事実だった。

カーテンの隙間から日差しが入り込んでいた。

ドクターの元へ行けば、平穏な時が過ぎてゆくかもしれない。
でも、きっと、私は、自分の出生を知りたいと思うに違いない。今、真実を知るチャンスなのかもしれない。

エディが言った、『新たに始まる、未来のきっかけになること』
その言葉が、ジェニーの心の中に大きく膨らんでゆく。

ジェニーがカーテンを開けると、窓から眩しい日差しが入りこんできて目を細めた。その光は、なぜか、希望の光のようにも見えた。

朝一番、ジェニーはドクターの元を訪ねた。

その日の午後。
「納得いかないですよ！」
ディックが声を荒たげると、礼拝堂の中で大きく響き渡った。

ジェニーは、今日から学校に来ることになっていた。だが、登校していなかったため、ディックは気になって、ドクターに連絡を取ると、ジェニーはエディの元へ行くことを聞かされた。
ディックは、そのことを知って愕然とした。昼休み、真相を知るため、ドクターと教会で待ち合わせをした。

「一体、ジェニーはどうしたんですか？　昨日、ドクターの所に行くと約束したのに」
ディックは、ドクターに強く問い詰めた。

「私にもわからない。今朝、ジェニーが訪ねて来て、エディの所に行くと言って謝りに来たよ」
「どんな理由で？　」
「真実を知りたいから、彼の所に行くと言っていた」
ディックが顔をしかめて、「真実って？　」
「それ以上は何も言わずに、彼の元へ行ったよ」
ドクターは目を伏せて言った。

「もう一度、ジェニーを説得してみます」
「待て、ディック」
ドクターが礼拝堂を出ようとする、ディックを引き止める。
「ジェニー自身が、彼の元へ行くことを決めた以上、そうするしかない」
「そんな・・・・・・それで、ドクターは納得したんですか？」
「納得はしていない。だが、法的に決めらたことだ、どうにも出来んよ」
ドクターの言葉には、悔しさが混じっているようだった。

「だが、なんだか変だとは思わないか？　」
ドクターは首を傾げた。
「一体、エディは、どこでハリスの死を知ったんだ。それに、私がエディの親変わりになることを決めて、ジェニーを引き取ろうと思うと、急にタイミング良く現れた・・・・・・まるで、私達の動きを知っているような行動に出ている」
ドクターが考えこんで、何気なく教会を出入する扉の方に目をやると、ピカリと光るものが見えた。扉は木製で出来ていて、２メートル以上の高さがあった。扉の上で何かが反射するように見えた。

ドクターが扉の方へ近づく。

「ドクター、他に手立てはありませんか？　」
ディックが、ドクターに切羽詰まったように尋ねた。
「なあ、ディック。脚立を持って来てくれないか？　」
ドクターは、じっと扉の上に目をやっていた。

朝。
エディは、町にあるホテルのレストランで朝食を取っていた。レストランと言っても、５人程座れるカウンター席と、テーブル席が二つだけの小さな店だった。

エディは、テーブル席に腰かけて、トーストとコーヒーを口にしていた。そこに、ドクターが現れた。
「おや、おはよう。ここにいることがよくわかったね」
エディは、コーヒーカップを手にしたまま感心したように言った。
「他所の人間が来て泊まるのは、ここだけだからな」
そのホテルは町で唯一のホテルだった。そこにエディがいることは、ドクターにはわかっていた。

「ジェニーは、どうしている？　」
「このホテルの部屋で、まだ休んでいるよ」と、エディは答えてコーヒーをすする。
「座ってもいいかな？　」
ドクターは睨みながら言う。
「どうぞ」
ドクターは、テーブルを挟んで差し向いに座る。
エディはコーヒーカップを置いて、「私に何か？　」

「昨日、教会の礼拝堂でこんなものを見つけたよ」
ドクターは、着ているコートの外ポケットから、小型カメラと取り出してテーブルに置いた。
「それから診療所には、診察用のベッドの下に、こんなものがあった」
今度は、別の外ポケットから小型の盗聴器を取り出してテーブルに置いた。
「知人の電気屋に見せたら、軍などが使う特別なものだと言っていた。こんなことまでして何が目的なんだ？　」
「これを設置したのが、私だと？　」
エディは否定する。
「とぼけるなよ・・・・・・ジェニーは、まだ普通の１５歳の少女だ。盗聴や盗撮までして、何を必死になっているんだ？」
「正直に言おう。私は、ある人物からジェニーを引き取って欲しいことを頼まれた。もちろん、彼女の将来も考えてのことだ」
「ある人物っていうのは、　東洋人でジェニーの親なのか？　」
「・・・・・・それは言えない。それに知らないほうがいい」
エディは、忠告するような言い方をする。

「ドクター、あなたもわかるだろう。ジェニーが私のところに来たいと言ったのなら、法的には

私が親権を持つことになる」
「法的に・・・・・・ふざけるなよ。一体、ジェニーに何を吹き込んだ？　」
ドクターは怒りを抑えながら言った。
「彼女も自分の人生に向きあうことを決めたんだろう」
エディは、論ずるように言う。

「ジェニーに不幸なことが起こった時には、私にも考えるがある」
「不幸なこと・・・・・・そんなことはありませんよ」
ドクターの言葉に、エディは堂々と言い切った。
「予定があるんで、この辺で失礼するよ」
エディは、コーヒーを飲み終えて席を立つ。

「ここを何時に立つんだ？　ジェニーの見送りぐらいさせてくれよ」
ドクターは、呼び止めるように言った。

「昼の１時には、ここを立つ。そうだ、ジェニーが可愛がっている猫も連れてゆく」
「猫・・・・・・！？」
ドクターは初めて猫の存在を知って、一瞬考えた。
「何だ、猫のことは知らないようだな。まあ、とにかく安心してくれ。では失礼する」
エディは、ドクターに背中を向けた。

「そういえば、ひとつ思い出したことがある」
再びドクターが、エディを呼び止めるように言った。
エディが振り返る。

「子供の頃、ハリスは話していた。将来は、国の秘密機関で働きたいと言っていた。当時スパイもののテレビドラマの主人公に憧れていた。ひょっとしたら、ハリスは、その憧れを叶えたんじゃないだろうかって、この道具をみた時、思い出したよ。あんたも、そんな一人じゃないのか？」

ドクターは、チラリと盗聴器と小型カメラに目をやって尋ねた。

エディは、フッと笑みを見せて、「そのテレビドラマなら、私も好きだった。だが、現実的なものじゃない。憧れは憧れのままだよ」と、サラリと言って去って行った。

ドクターは、何かをはぐらかされたようで悔しさがこみ上げて来た。だが、東洋人と言ったことに、何か遠い記憶が甦ってきた。そのことを思い出そうとして、しばらく考え込んだ。

ホテルの前で、ロールスロイスが停まっている。
ホテルの中から、ジェニーが出てきた。

ジェニーは髪を上げて、黒のジャケットにパンツ姿だった。それは、エディから用意されたもので、普段とは違った雰囲気が漂わせて、妙に大人びた女性に見えた。
一瞬、運転手がジェニーに見とれていたが、すぐに我に戻り、「荷物をお持ちします」

運転手は、スーツケースを受け取り、トランクの中にしまい込んだ。次に子猫が入った、籠タイプのコンテナを助手席に置いた。

「エディさんは？　」
「今、あちらの方でお電話中です」
運転手が顔を向けると、遠くで背中を向けているエディの姿が見えた。

「一体、彼女がセカンドというのは、どういうことですか？　」
エディは、携帯電話に怒りを抑えながら尋ねた。
「ええ、もちろん。今から彼女を連れて帰ります。任務は完了ですが、なぜ、仕事をさせる私まで、大事な事を黙っていたんでしょうか？　」
「・・・・・・」
エディは相手の言い分を聞いて、「わかりました。いずれにしても、ロンドンに着いたら伺います」

エディは不服そうに電話を切った。

「ジェニー」
後ろから声がして振り返ると、ディックとアンジェラが見送りに来ていた。
「・・・・・・」
二人が、ジェニーの姿を見て、運転手と同じように見とれていた。
「とても素敵よ」
アンジェラが、ジェニーの姿に感動した様子で言った。
「とても似合っているよ」
ディックも素直に褒めた。

「役に立つかわからないけど、これを渡そうと思って」
アンジェラが、ジェニーが休んだ分の授業内容を書いたノートを渡した。
「ありがとう」
ジェニーは嬉しそうに受け取る。
「これは僕からだ。いい弁護士になってくれ」
ディックは願うような言い方で、学校のパンフレツの入った用紙を渡す。
「ありがとうございます。エディさんも弁護士になることに協力してくれると言ってくれました」

エディが戻ってきて、見送りにきた二人の顔を見るも、黙って後部座席に乗り込んだ。

「ドクターは、どうしたんですか？」
ジェニーが気にかけた。
「見送りに誘ったんだが、急に用事があるらしく、ジェニーには、よろしく伝えておいて欲しいと頼まれたよ」
「そうですか・・・・・・ドクターに、よろしくお伝えください」
ジェニーは、ドクターに別れを言えないのが残念そうに見えた。

「そろそろ行こう」
エディが言う。
「それじゃ、元気で」
ジェニーは、ノートとパンフレットを抱きしめるように持ったまま言う。
「ジェニーも元気でね」
アンジェラが涙声になる。

「もしも、向こうでの生活が無理なら、すぐに戻っておいで、ドクターも自分も待っているからね」

ディックが優しく言う。
「それじゃ、行きます」
ジェニーが二人に礼をして、エディの隣の座席に乗り込んだ。

車が動き出した。
ジェニーが車窓を開けて、グッと涙をこらえながら手を振る。
アンジェラは、大粒の涙がこぼれて止まらない。
ディックは、アンジェラの肩に手を掛けて、目で車を追っていた。

その頃、診療所では、ドクターが電話で話をしていた。

「エディの所へ行く、ジェニーのことを気にかけておいてほしい」
「でも、どうして？」
ドクターは、娘に電話をしていた。娘は、ロンドンで探偵事務所を営んでいた。
「今後、ジェニーがどうなるのか知りたいんだ」
「わかった。出来るだけやってみるわ」
「それから、もうひとつ頼まれてくれないか？　」
「まだ、あるの？　」
娘は迷惑そうに言う。

「トヤマ・サチコという女性のことを調べて欲しいんだ」
「トヤマ・サチコ・・・・・・！？　その人は、パパとどういう関係なの？　まさか、浮気相手なんかじゃないでしょうね？　」
「バカなことを言うなよ。もう１２年も前のことだが、ジェニーと何か関係あるかもしれない」
「ずいぶん昔のことね。どうして、また？　」
「思い出したんだ。確証はできないが、今何をしているか知りたいんだ。当時は、ロンドン大学の学生研究生だったと思う」
「わかったわ。調べてみるけど、ちゃんと調査費はもらうわよ」」
「ああ、頼むよ」
ドクターが電話を切ると、背もたれの椅子に寄りかかり、何か深い思いにふけた。

「着いたよ」
エディが、隣のジェニーに声を掛けた。

ジェニーは、二人に見送られる時、グッと泣くのをこらえていた。
泣いてしまうと、淋しさがこみ上げてくる気がした。自分がエディの所に行くことを、泣くことで間違いだと思われたくなかった。
そんな強い気持ちを持ったまま、車のシートに身を沈めると、いつの間にか寝入ってしまった。

ジェニーが目を覚ますと、外は真っ暗で、すっかり夜になっていた。
車は、堂々たる門構えの前に停まっていた。
「帰ってきました」
運転手が携帯電話で告げると、門が自動に開いた。
車が門の中に入ると、正面に大きな邸宅が見えた。

邸宅の玄関の前に車が停まった。

「さあ、行こう」
エディの言葉で、ジェニーは車から降りた。
ジェニーは、これから何が起こるのか、不安と期待を抱いたまま邸宅の中へ入って行った。

後編につづく